



こーひーぶれいく

宮沢賢治はなぜ多くの元素を作品に用いたか？

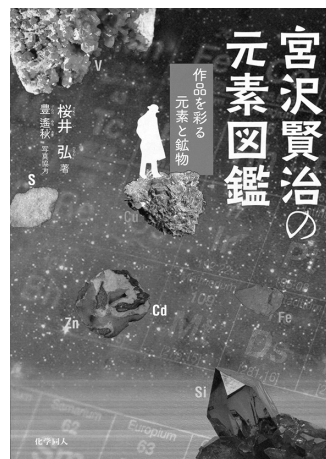
桜井 弘
Sakurai Hiromu

『銀河鉄道の夜』や『春と修羅』など数々の不思議で美しい作品を著した宮沢賢治（1896 – 1933）は、わが国を代表する童話作家・詩人としてよく知られています。岩手県花巻に生まれ、川口尋常小学校、盛岡中学校、盛岡高等農林学校と大学院を終えて、花巻農学校の教師となりました。頸から垂らしたシャープペンシルと手帳を持ち歩き、自然と自らを書きつけ、“心象スケッチ”と名づけました。農業の実践を目指して農学校教師を辞し、“羅須地人協会”を設立して活動しますが、病に倒れました。回復後は採石工場の技師として働きますが、再び病に倒れ、37年の短い生涯を閉じました。

賢治は、法華経への信仰と土壌学を中心とした自然科学の精神をベースにして詩と童話を書きました。創作活動は『春と修羅』と『注文の多い料理店』の出版までの前期と教師をやめてからの生活の場での後期に大きく分けられ、ともに私たちの心に強く訴えます。

「わたくしといふ現象は 仮定された有機交流電燈の ひとつの青い照明です」 『春と修羅』
「われわれに必要な科学をわれわれのものにできるか」 『化学ノ骨組ミ』

賢治の心の底に流れるものは、幼少期の“石集め”に始まりました。宇宙と自然、とりわけ、鉱物を構成する元素に深い関心を示し、高等農林学校で学んだ『化学本論』を座右の書としました。1869年に元素周期表を発表したロシアのメンデレーエフは、鉱物（褐簾石）の分析により化学に目覚めました。メンデレーエフも賢治も共に鉱物から化学の重要性に気づきました。賢治は、自然科学を底流として科



学（化学）と文学とを融合させる道に進みました。農学校の教師のころ、『春と修羅』に感動した詩人の草野心平に「わたくしは詩人としては自信がありませんけれども、1個のサイエンティストとしては認めていただきたいと思います」と書き送りました。サイエンティスト賢治が28歳から35歳までの歳月を費やして書いた、2人の少年の銀河の旅を主題とする『銀河鉄道の夜』は彼の最高傑作のひとつに挙げられると思います。

まったく向ふ岸の野原に大きなまっ赤な火が燃やされその黒いけむりは高く桔梗（ききやう）いろのつめたさうな天をも焦がしさうでした。ルビーよりも赤くすきとほりリチウムよりもうつくしく酔ったやうになってその火は燃えてゐるのです。

「あれは何の火だろう。あんなに赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう。」ジョバンニが云ひました。

「蠍（さそり）の火だな。」カムパネルラが又地図と首っ引きして答へました。

『銀河鉄道の夜』9. ジョバンニの切符

夏の南の夜空に輝く星の色を、ルビーでもなく、Liの炎色反応でも得られない「サソリ座」の星アンタレスとして表しています。

賢治の作品群を読みながら、筆者は『元素』の扱い方に感銘を受けました。賢治は作品、手帳、手紙に45種類の元素を用いて自然と自らの心象を表現する新しい方法を発明した、と考えています。45種類の元素を用いて、賢治はどのような作品を書いたかの詳細は、『宮沢賢治の元素図鑑』*をご参照いただければ幸いです。

（京都薬科大学名誉教授）

*事務局注：ISBN978-4-7598-1966-3, A5・160頁、本体1,600円+税、化学同人、2018年